私の履歴書

谷口吉生

㉕

鈴木大拙館

鑑賞の余韻に思索空間

静寂・自然・自由の概念体感

近年、石川県で2つの公共建築を設計する機会があった。一つは「片山津温泉総湯」。市民のための温泉を観光客との交流の場としても活用する計画。もう一つは、「無」を形にする――。金沢市に2011年に完成した「鈴木大拙館」は、私が設計した美術館の中で、最も難しい課題が与えられた建築だった。

鈴木大拙は禅の思想を世界に広めた国際的な仏教学者。中でも1960年代以降、物質文明に疑問を抱く米国の若者に熱狂的に支持された。アップル創業者のスティーブ・ジョブズ氏も影響を受けた一人とされる。60年代に仕事で日米を往復していた私も、ヒッピーと呼ばれる若い人たちがさかんに香をたいたり、座禅を組んだりしているのを目にしていた。しかし、米国の豊かさにあこがれる多くの日本人に、彼らの切実さはまだ理解できなかった。

大拙が説いたのは「無」であり「無心」。つまり、欲にとらわれることのない自由な心の境地だ。禅と日本文化の根源を説くこの思想家の記念館の設計を任されたが、展示できる「作品」はごく限られている。そこで具体的な形としてイメージできるものを探そうと、私は著作を手当たり次第に読み始めた。

敷地は加賀藩の本多家下屋敷跡で、小立野台地から続く斜面をのぞみ、季節ごとに変わる緑地を借景できる。鈴木大拙の生家跡からも近い。そのような環境に「玄関棟」「展示棟」「思索空間棟」を配置した。入り口の「玄関棟」からは、大拙が生まれた時から立つクスノキが見える。「展示棟」には、大拙の著作、書や書簡が展示され、読書スペースも一角に設けた。人工池に浮かぶ「思索空間棟」は、他から隔絶された空間の中で、展示品を鑑賞した余韻とともに、静かに思索にふけることができる。

3棟をつなぐのは、真ん中が壁で仕切られているだけの1本の廊下だ。しかし、往路が屋内、復路が外部に開かれ、異なる景色が次々と現れるので、まさか同じ廊下を戻ってきたとは誰も思わない。このような廊下を通って3つの空間を回遊することで、大拙の思想の底流にある「静寂」「自然」「自由」といった概念を体感できる。

「鈴木大拙館」（北嶋俊治撮影）

池を縁取る「展示棟」の石垣は、石の断面の向きを変えて積み上げている。父が自作に取り入れたこの独特の石積みは、交互に重ねる普通の方法よりもモダンな印象で、構造的な工夫もされている。父は東京に設計した仏教の研究所「不二禅堂」の完成時に大拙と会い、共通の故郷である金沢の思い出を語り合った。2人の出会いの記憶を石垣のデザインに込めたつもりだ。

「思索空間棟」に座ると、四季の景色が壁面の開口部に絵画のように縁取られて見える。春には緑が萌え、秋は朱に染まる。清冽な水面は、夏の太陽の下で輝き、冬空に舞う雪に曇る。大拙の著作にこんな文章がある。

「移りゆく時間、そのほかに永遠はない。永遠は絶対の今である」

「無」とは何もないゼロの世界、変化と無縁の止まった時間だと考えがちだ。しかし、季節はつねに移り変わる。終わることのない自然界のサイクル、その時間の流れに身をゆだねて生きることを、大拙は「無」と表現したのではないか。（建築家）

私の履歴書

谷口吉生

㉖

京博平成知新館

現代に合う日本建築に

最新の素材と工法を生かす

京都国立博物館（京博）の「平成知新館」の設計者に選ばれたのは、ニューヨーク近代美術館（MoMA）のコンペに当選して間もないころ。ところがその完成は、長引くことが予想されたMoMAの10年後、2014年となる。

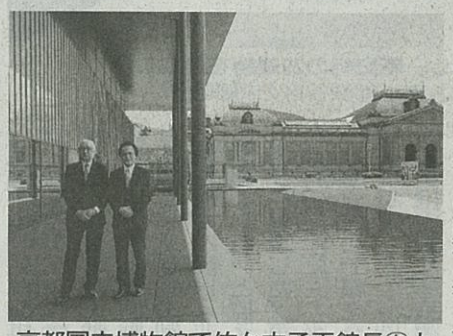
「法隆寺宝物館」を設計した東京国立博物館（東博）と京博は、上野、京都という歴史ある都市に立ち、隣に片山東熊が設計した明治期の洋風建築がある。平成知新館の設計でも都市の歴史、隣接する時代の異なる建築という2つの条件に応えることが課題だった。

京都の碁盤の目状の町と関係づけるため、敷地に2本の軸線を引いた。一つは1897年に開館した洋風建築の本館（重要文化財）の正面玄関と正門を結ぶ東西の軸線。もう一つは、京博に隣接する三十三間堂の南大門から京博の南門を貫通する南北の軸線だ。この南北の線をさらに延ばし、そこを平成知新館の新しい出入り口とした。後にその直下から、豊臣秀吉ゆかりの方広寺の南門跡が発掘されて驚くことになるが、軸線の重要性が証明されたといえる。

本館は左右対称で明治期の典型的な洋風建築だ。その隣に設計する平成知新館は、高さをそろえることなどで調和を保ちつつ、現代にふさわしい日本建築を目指した。非対称の構成、柱と梁による構造、深く張り出すひさし、室内に差し込む柔らかな光など、日本建築の特質を現代建築の最新の素材と工法でよみがえらせるのだ。

博物館等の公共建築を設計する際には展示ケースや家具、庭や広場の設計も任せてもらうようお願いする。竣工後は、所定以外の家具や備品類の設置、看板や貼り紙などの掲示を禁止する方針を守ってもらえるよう管理者と協議する。建築から周辺まで総合的に環境を整え、貴重な公共建築を可能な限り創建時の姿のままで維持するためだ。

平成知新館でも新しい展示ケースを設計した。文化財の保存を最優先し、ケースの安全性や操作性を十分に確認した上で、来館者が美術品との一体感を感じられるように全面ガラス張りの大型展示ケースを提案。展示説明の表示や照明装置も建築との調和を考慮した方針を考えたが、博物館の了承がなかなか得られない。工期が迫る中、佐々木丞平館長が金沢市を訪れ、私が設計した「鈴木大拙館」に立ち寄られた。佐々木館長は大拙館を見て「谷口さんの建築がすべて理解できた」と話され、その後の設計を全面的に支援してくださった。そのおかげで16年にわたるプロジェクトを締めくくることができたと思う。



京都国立博物館で佐々木丞平館長㊨と

平成知新館は建築業協会賞（BCS賞）という賞を受賞。私は「土門拳記念館」で日本芸術院賞、「資生堂アートハウス」と「法隆寺宝物館」で日本建築学会賞、MoMAで高松宮殿下記念世界文化賞などを頂いた。どれも大変名誉ある賞だが、BCS賞の受賞を重ねる度、特別うれしく思うのには理由がある。

建築主、設計者、施工者全員に贈る、この賞の趣旨に私は共感している。授賞式で建築にかかわった関係者が再び集まり、皆で受賞を喜び合う時、時間と空間を共有しながら力を合わせてものを作りあげる「一座建立」の精神を感じるのだ。（建築家）

私の履歴書

谷口吉生

㉗

銀座「SIX」

「のれん」でにぎわい演出

歩行者の町に溶け込ませる

今年4月にオープンした「GINZA SIX」は銀座最大の商業施設であり、初期の都市計画から設計監理まで膨大な数の人が参加した計画だ。私は主に都市計画と外観のデザインに携わり、それぞれ森ビル、鹿島の設計本部と協働した。

銀座6丁目地区の2街区にわたる大規模な計画を進めるには、東京都や中央区など行政との協議が不可欠だ。また地元の了承も必要である。銀座には「銀座街づくり会議」という街づくりを支援する組織があり、ここからのご協力を得ながら銀座地区の要望もお聞きした。

商業建築としての収益性、再開発事業としての公共性の2つを両立するため、さまざまな提案を行った。たとえば三原通り沿いに、水と緑がある「ストリートパーク」を設けるというもの。計画途中で観光バス停車場への要望があり、2階レベルに移されたのは残念だったが、どうにかデッキとして実現されている。

外観デザインは、銀座最大の商業施設としての特徴をあらわすために、建築の全周に、水平方向に連続するステンレス製の「ひさし」を取り付けた。時間によって変化する銀座の光を映し込む「ひさし」によって、遠くから見ても「GINZA SIX」の存在とその大きさが分かる。

高さ31㍍以下のかつての町並みを形成する部分には、銀座の町のにぎわいを演出する多様なデザインを「のれん」のように掛けた。中央通り沿いに軒を連ねる各店舗が一定のルールに従ってそれぞれの店の外観、つまり「のれん」を自由にデザインできる。模様替えも可能、テナントが変わった時も大掛かりな工事なしで交換できるよう設計してある。銀ブラという言葉が象徴するように、銀座は伝統的に歩行者の町だ。水平方向の「ひさし」とは対照的に、外観を垂直方向に小さく分割する「のれん」は、巨大な建築を無理なく歩行者の町に溶け込ませるための工夫でもある。

「ひさし」と「のれん」による外観の設計には、さまざまな課題があった。私が意匠の検討を担当し、鹿島が技術面の検討を担当する両者の協働で実現できた。

一辺が100㍍を超す「GINZA SIX」とほぼ同時期に、東京の青山通りに面する約15㍍四方の小規模な事務所ビルを設計した。2つの建築はその規模を含め、あらゆる面で対照的だ。「GINZA SIX」の外観は私が提案したシステムによって、異なる建築家が参加できる建築だ。一方の青山通りの「フォーラムビルディング」は、私自身が隅々のディテールまで直接手がけ、装飾的な要素を一切取り除いたシンプルな建築だ。建築のプロポーションに合わせて極限まで細くした構造体は建築の専門家の興味を引いた。

銀座最大の商業施設「GINZA SIX」（SS東京提供）

「GINZA SIX」の設計にかかわり始めた10年ほど前、中央通りを歩いていてあるものに目が留まった。敷地の正面、歩道と車道を隔てる植え込みの中に、小さな長方形の記念碑がある。赤い石に「商法講習所」と書かれ、黒い石の屋根がのった建築の形をしている。裏側に「一橋大学発祥の地」の文字。なんと父の名前が碑の設計者として刻まれていた。設計を始めた銀座最大の建築の前で、銀座最小の建築を発見した時は心底驚いた。（建築家）

私の履歴書

谷口吉生

㉘

ホテルオークラ

開業半世紀で建て替え

旧メインロビーの一部復元

2014年5月、東京・虎ノ門の「ホテルオークラ東京」の建て替えが報じられると、建築の保存を望む声が挙がった。欧米の主要な新聞や雑誌が、その洗練されたロビーのデザインなどをたたえ、取り壊しを惜しむと、その動きがまた記事になる。そのうちに、オークラのロビーは国内外からの見学者であふれるようになった。

父が設計委員長を務めたオークラは、東京五輪を2年後に控えた1962年5月に開業した。外国の訪問客をもてなすにふさわしいホテルを目指す実業家、野田岩次郎氏らの掛け声の下、第一線で活躍する建築家や芸術家たちが集った。日本の伝統的な意匠を重ねた。しかし、父が設計したオークラ・ランタンや梅の花のテーブルセットが置かれたメインロビーは「聖域」のように取り扱われ、改修が必要になると私に電話がかかった。「変えないように、変えよう」。創建時からオークラ建築に深くかかわり、社長になられた大崎磐夫氏と相談しつつ、改修したことを気づかれないよう改善した。その私に、オークラ建て替え計画への参加の依頼があり、すでに提案されていた基本計画を、慎重に検討した。

配した国際的ホテルの誕生は、戦争の記憶が色濃い当時、多くの日本人を勇気づけることにもなった。

オークラは半世紀で改修を重ねた。

霊南坂、江戸見坂の2つの坂道が出合う旧ホテルの車寄せがあった場所からは、道を隔てて米国大使館やその庭を望むことができる。この場所には父の師でもある建築家の伊東忠太が昭和初期に設計したオークラ別館、各国大使館、05年に私が設計した「東京倶楽部」（英国を手本に井上馨・外務大臣の発案で誕生した明治期の社交場）などが連なる。新しいオークラ広場の設計は周辺の緑豊かな町並みとの連続性も重視している。

ホテルオークラの設計は大成建設の設計部をまとめ役としたチームで行われている。近年、外部の組織と協働する設計が少しずつ増えた。「GINZA SIX」（17年）「GCコーポレート・センター」（11年）は鹿島の設計部、「日産自動車グローバル本社」（09年）は竹中工務店設計部と組んだ。大型化・複雑化する事業用施設の設計に、よきチームワークが求められる時代になった。

最終的にホテルとオフィスが入る高層棟、ホテルのみの中層棟が建てられることになり、私は集古館を含めた広場と2棟のホテルのロビーを設計することになった。高層棟のロビーは、内部に父の設計した旧ロビーの主要部分を忠実に復元。上部のサロンからは、米国大使館を背景に、オークラの原点ともいえる集古館の姿が広場に設けた水盤に映るのが見える。一方の中層棟のロビーは、シンプルな空間にオークラゆかりのアートをちりばめた美術館のようなデザインとなる予定だ。

解体前のホテルオークラ本館ロビー

霊南坂がある道にはオークラ別館、各国大使館、05年に私が設計した「東京倶楽部」（英国を手本に井上馨・外務大臣の発案で誕生した明治期の社交場）などが連なる。新しいオークラ広場の設計は周辺の緑豊かな町並みとの連続性も重視している。

ホテルオークラの設計は大成建設の設計部をまとめ役としたチームで行われている。近年、外部の組織と協働する設計が少しずつ増えた。「GINZA SIX」（17年）「GCコーポレート・センター」（11年）は鹿島の設計部、「日産自動車グローバル本社」（09年）は竹中工務店設計部と組んだ。大型化・複雑化する事業用施設の設計に、よきチームワークが求められる時代になった。（建築家）